

被災者を支えたボランティア

東日本大震災で被災された方々に対して、山形市民が様々なボランティア活動をされました。ほんの一例ですが、ここで紹介します。

山形県立山形南高等学校

東日本大震災が発生した11日は期末試験の最後の日だった。翌日、桑山サッカー部長は、宮城県名取市に住む父親を訪ね、被災地の惨状を目の当たりにし、何か行動に移さなければと思った。

学校に戻り、田中生徒会長と相談し、自分たちで出来る支援はないかと考えた。さらに、先生方と相談のうえ支援活動を行うこととなる。

■行動は早かった

まず春休み期間に、サッカー部・バレー部等と生徒会が、市の避難所で各地から寄せられた支援物資の管理を行うボランティアを行った。力の要る作業が多かったが難なくこなした。避難所の子どもたちとは、サッカーを通してふれあい、喜ばれたという。

また学校内での募金活動のほか、山南と山東の野球部・生徒会で市内2箇所において街頭で募金活動を行った。

サッカー部では、4月に被災地に赴き、高齢者の家の片付けや農地の整理作業、被災した消防車(展示用)の清掃のボランティアを行った。

■Tシャツで支援

バレー部は、交流のあった石巻商高に3月末に支援物資を届け、5月には被災地にて民家の泥の片付けを手伝う支援活動を行った。



左から桑山サッカー部長、古原バレー部マネージャー、田中生徒会長、日野生徒会副会長、江口生徒会議長

作販売している。この売り上げを体育振興のために寄付するという試みを実施し、県内外の学生等から賛同を得て、すでに2,000枚の協力をいただいた。

■校長先生の応援歌

活動した南高生は、延べ150人超。自ら考え積極的に行動する生徒たち。校長先生はこの生徒たちを称え励ますため、自ら作詞し、知人に作曲を依頼、「朝は来るよ」という曲を生徒たちに贈られた。

社団法人山形県看護協会

地震や津波の災害に留まらず追い討ちをかけた福島第一原発事故。幸いにも被害の少なかつた山形であったが、

会員数7,250人以上の看護師や助産師等からなる当協会は、県民の健康な生活の実現とともに、地域医療の推進に寄与することを目的に活動されている。

■「まちの保健室」を開設

電気が復旧したあと「対策本部」を設置し、被害状況の情報収集から活動をはじめた。3月19日、市の避難所に長テールの両端に紅花色ののぼり旗が目を引き「まちの保健室」を設置し、14時から20時の間、健康不安の相談に対応した。「学校の保健室」にならない、こころやからだについて、気軽に相談できることを目指した。

雪が降り、余震が続き、燃料不足で寒く不自由な避難生活。慣れない生活で体調を崩す避難者たちに対して、「健康相談」「こころのケア」を提供した。

この「保健室」には、毎日血圧測定に訪れ、ここで安堵の表情を見せる人が多い。避難者と話すことでコミュニケーションをとり、心よりどこになるよう努めたという。女性支援者が少なくなる夜間まで開設しているため、特に避難者の女性から感謝の声が多かった。

■ナースの力強さ

4月に入り、さらに人材確保に苦心した。



左から志鎌治子さん、川村良子会長、濱口菊枝常任理事

夜勤明けに直行する方、人事異動のある多忙期で勤務シフトを変える方もおられた。

「まちの保健室」は避難所の閉鎖日までの約100日間、欠かすことなく相談を受け

た。延べ200人超の支援ナースの協力は、その使命感で支えられた。ナースのひとりには、「この活動で元

氣と勇気と力」ももらったという。また、協会では、支援ナースと話す機会を密にし、後方からのフォローも忘れなかった。

当協会では、避難所の支援活動のほか、被災地へ災害支援ナースの派遣、気仙沼市の看護専門学校へ白衣と靴等の物資支援や募金など幅広く行っている。

最後に、川村良子会長は、「今後も災害支援ナースの育成に努めます」と抱負を語られた。

蔵王温泉地区のみなさん

このたび蔵王温泉地区の方々が行った支援活動について、蔵王温泉観光協会青年部会長の齋藤龍太さん・みなさんより話を伺った。

■最初は支援物資から

3月11日余震が続く中、青年部と消防団で地区内を巡回、まだ雪深い時節、停電のなか不安に過ぐす家庭に、ろうそくを配りながら声かけを行ったという。

また、市の避難所に多くの避難者がいるとの情報を得て、地元協力により布団、タオル、歯ブラシ等の支援物資を200組届けた。

■何かできる、だから被災地へ

被災地の悲惨な状況が徐々に明らかになり「自分たちができることを何かやろう」と思い、齋藤さんは仲間と話を持ちかけた。「現地で被災者を励ませたい」との思いから、石巻市へ出向き、がれきの撤去、避難所となつていく小学校で炊き出しを始めたのは4月3日だった。以来、仲間たちと数度訪れ、被災者に「カレーライス」や「かき揚げそば」の振る舞いなど8回も続けられた。

このような被災者支援のほかに、現地で支援する人たちへの炊き出しも行ったという。



地区のみなさん、大森さん、高橋さん、後列左から、板垣さん、伊東さん、鈴木さん、齋藤さん、三部さん、勝石さん、津波が襲った跡の泥の中から発掘して洗浄する作業も行った。

■「雄勝石」を取り戻せ

被災地では、がれきを撤去する作業のほか、石巻市雄勝町の名産である「雄勝石」を、津波が襲った跡の泥の中から発掘して洗浄する作業も行った。

■女性ならではの支援も

被災地で炊き出しの支援に参加し、多いときは1,500食を提供したという。支援した女性からは、「自分たちの活動を喜んでくれると励みになる」ということがあった。

また、きれいな布で髪留めにする「シュシュ」を100個作り、被災地の女性や子どもたちに配ったところ、大変喜ばれたというエピソードもあった。

■従業員やアルバイト、音楽仲間も

こうした取り組みには、蔵王温泉地区の多くの人が積極的に関わっている。地区の方々ははじめ、宿泊施設の従業員やアルバイト、音楽イベントでつながったミュージシャン等、皆の思いが今回の活動の支えとなった。自分たちの気持ちを絶やさないうえ、これからも頑張りたいと話された。

山形市女性防火連絡協議会

震災直後、市消防長の依頼を受け、市の避難所で「配膳・配食」の支援活動を快く引き受けることになった。

当協議会は、市内7地区の女性防火クラブから構成され、火災に至る前の「予防消防」の推進のため、ボランティアによる約300人の推進員たちが日頃から地域を守っている。5年前から住宅用火災警報器の設置を呼びかけ、また毎年「炊き出し」「初期消火」訓練などを行い、日頃から非常時に備え活動が続いている。

■家族の協力もあってからこそ

3月22日から活動をはじめ、避難所「落合スポーツセンター」の朝食は7時から9時、夕食は17時から19時までの毎日2回、配食する活動をされた。当初は、車のガソ



左から安藤愛子副会長、沖長子会長、小座間久子副会長

リン不足から、すべての地区の推進員による協力が困難となるなか、近くの千歳地区の推進員がこの活動を支援した。「快く引き受けていただき感謝の気持ちでいっぱいでした」と会長は言う。

寒い季節のなか、外は吹雪の時もあり、皆さんに温かい食事と思いつつ後列になると冷めてしまったという。1,000人を超す避難者に、毎食違う「食材と量」「食器の大きさ」をどう均等に配るか。不公平にならないよう悪戦苦闘が続いたが、時間が経過するにつれ要領を得てスムーズな流れになった。毎日続くこの活動で「腱鞘炎」になった方もおられたという。

また、この支援の裏側では、「家族の理解と協力があったからこそ出来ました」と振り返る。

■割烹着姿に安心感

避難所での活動時は、みんなが「白い割烹着姿」で作業にあたった。避難者の方々から「割烹着姿っていいですね。母親を思い出します」「安心感があります」「ありがたう」「今度、福島には是非いらしてください」とあふれるほど感謝の言葉を聞いたという。支援活動は4月11日まで続けられ、延べ229人の推進員の協力のもと、避難者への滞りない食事の提供を支えた。最後に「こういう時こそ、私たちの活動が役に立って良かった」と異口同音に話された。